

一 次 of 文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、字数制限のある解答については、句読点・記号も一字とします。

あなたは人生の先輩を持っていますか。子どもの頃、人生の先輩に出会ったことがありますか。

紙芝居は子どもが人生の先輩に出会う場を作りました。その先輩は①「勝ち組」の大人ではなく苦労人の大人でした。

私は紙芝居屋のおじさんたち（おばさんもしました）のことを言っているのです。紙芝居がブームになった戦前の一九三〇年代と敗戦後の一九五〇年前後はどちらもア不況の時代で、失業者があふれていました。紙芝居屋は失業者たちが②差し当たって生き抜くために食いぶちを稼ぐ仕事でした。世間も紙芝居屋を「半失業者」と見なしていました。

紙芝居屋は子どもが好きだから選んだ仕事ではなく、語りが得意だから始めた仕事でもありません。他に仕事がないから紙芝居屋になったのです。子どもの五円、十円のこづかいを当てにする商売なので大きな稼ぎは期待できません。街頭でする仕事なので雨が降れば休業の「お天気商売」です。月に十日も雨が降れば、その月の暮らしが困難です。

こんなイ境遇のなかで紙芝居屋は子どもと向き合っていたのです。私が絵元の塩崎さん宅で出会った一世代前の先輩紙芝居屋はみんな無口で「長屋に住む気のいいおっちゃん」の雰囲気を持つ人たちでした。

紙芝居屋の風景を描いた松葉健さんは、紙芝居屋のおじさんが腰にぶら下げた手ぬぐいの汚れに紙芝居屋の生活のを感じたといいます。子どもたちはおじさんたちが人生の成功者ではないことを知っていたのです。でも、おじさんの熱のこもった語りから下積み of 大人の誠実さ、人のよさを感じました。紙芝居屋の語る作品世界もまた、子ども of 不安を支え、勇気づけ、大人社会 of カラクリを示すものでした。子どもたちは世間のウ片隅でひっそりと暮らす紙芝居屋との出会いから、大人の苦労と世間のカラクリを知りました。

学校の先生や教育熱心な親は人生の成功者をめざして子どもを進学競争に駆り立てます。マスコミも成功者をたたえます。でも成功者はほんの一握りの人です。子どもたちは小学生時代から「成功者になれなかったら」という不安に悩まされます。

そんな子どもの不安を受け止め支える場として紙芝居があったのです。今は七十代になった人が紙芝居体験を回想してこう言います。

「紙芝居屋のおじさんが物語の^エ合間に言う『おごれる者は久しからず』という言葉に、必ずしも人生の成功者とは言えなかったおじさんの人生観がにじみ出ていた。学校の先生のお^オ説教より心に深く残った」

子どもは知らず知らずのうちに^③苦労人の大人から人生の体験を学び、自らの不安を支えるより所にしたので。人生の先輩を持つ幸せ、さらに苦労人の先輩を持つ幸せを、子どもは世間から見下げられた紙芝居屋の存在に見たのです。

逆に、ややもすれば生活の苦労に負けそうになる紙芝居屋を子どもたちは支えました。失意のまっ只中^{ただなか}にいた紙芝居屋の三橋さんに元気を与えたのは大阪の子どもたちでした。^④稼ぎは少なくても紙芝居屋を続けた人たちはそのことを感じていました。

あなたは人生の先輩を持っていますか。あなたも子どもたちの人生の先輩になりませんか。^⑤人生をさまよっているあなたこそが先輩にふさわしい存在です。

（鈴木常勝『紙芝居は楽しいぞ！』による。作問の都合上、本文の一部を変更しています。）

問一 — 線ア↘オの漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二 — 線①『勝ち組』の大人」と同じ意味のことばを本文中から六字で探し、書き抜いて答えなさい。

問三 — 線②「差し当たって」とありますが、ここでの意味として最も適当なものを次のア↘エから選び、記号で答えなさい。

ア なげやりに イ 行きづまっつて ウ 無理をして エ とりあえず

問四 — ☐ に入ることばとして最も適当なものを次のア↘エから選び、記号で答えなさい。

ア 激しき イ 厳しき ウ 楽しき エ 寂しき

問五 — 線③「苦労人の大人から人生の体験を学び、自らの不安を支えるより所にしたので」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

- (1) どのようなことに対する不安ですか。十字以内で答えなさい。ただし、句読点は字数に含みません。
- (2) どのような人生観を「より所」にしたのですか。わかりやすく説明しなさい。

問六 — 線④「稼ぎは少なくても」とありますが、紙芝居屋の「稼ぎ」が少ない理由を二つ、わかりやすく説明しなさい。

問七 本文中には次の一文が抜けています。どの文の後に入りますか。この文が入る直前の五字を書き抜いて答えなさい。
紙芝居屋も子どもたちから生きる力を受け取りました。

問八 — 線⑤「人生をさまよっているあなたこそが先輩にふさわしい存在です」とありますが、あなたにとって「人生の先輩」と言える人はどのような人ですか。八十字以上百字以内で自由に述べなさい。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、字数制限のある解答については、句読点・記号も一字とします。

日が暮れて間もなく、女中が二人連れの客だということで、どうせ素泊まりの若い男女だろうと思いついてみると、案に相違して地味な和装の四十年配の女が一人、戸口にひっそり立っている。連れの姿は見えない。

女は、空気があれば二泊したいのだが、と言った。言葉に、日ごろ聞き慣れないなまりがあった。

「お一人様で？」

「いえ、二人ですけれど。」

女は振り返って、半分開けたままの戸の外へ「スルド」く声をかけた。ちゃんづけで名を呼んだのが、な、お、ち、や、と聞こえた。青白い顔の、ひよろりとした、ひよわそうな少年が戸の陰から現れて、はにかみ笑いを浮かべながらぺこりと頭を下げた。両手に膨らんだボストンバッグを提げている。もう三月も下旬だというのに、まだ重そうな冬外套のままで、襟元から黒い学生服がのぞいている。そういえば、女のほうも厚ぼったい防寒コートで、首にスカーフまで巻いていた。

「これ、息子でやんして……。」

女もはにかむように笑いながら、ひつつめ髪の毛のほつれ毛を耳の後ろへかき上げた。

初めは、*近在から市内の高校へ受験に出てきた親子かと思ったが、女中によれば、高校の入学試験は半月も前に済んだという。そんなら、進学準備の買い物だろうか。下宿探したろうか。それとも、卒業記念の観光旅行だろうか——いずれにしても、二泊三日とは豪勢な、と思っていたが、書いてもらった宿泊カードを見ると、なんと北のはずれから来た人たちである。

これは、ただの物見遊山の旅ではあるまい。宿泊カードの職業欄に、主婦、とか、今春中学卒業、などと書き入れるところを見ると、あまり旅慣れている人とも思えないが、どうしたのだろう。

「まさか、厄介なお客じゃないでしょうね。」

と女中が声を潜めて言った。

「厄介な、というと？」

「たとえば、親子心中しに来たなんて……。」

「あほらしい。」

「だけど、あの二人、なんだか陰気で、湿っぽいじゃありませんか。めったに笑顔を見せないし、口数も妙に少ないし……。」

「それは田舎の人たちで、こんなところに泊まるのに慣れてないから。だいいち、心中なんかするつもりなら、なんでわざわざこんなところまで遠出してくるのよ。」

「ここなら、近くに *東尋坊もあるし、越前岬も……。」

「景色のいい死に場所なら、東北にだっていくらかもあるわ。それに、心中する人たちが二晩も道 A 食う？」

「インガイ、道 A じゃないかも、奥さん。まず、明日は一日、死に場所を探して、明後日はいいよ……。」

「よしてよ、薄気味悪い。」

もちろん、冗談のつもりだったが、翌朝、親子が、食事を済ませると間もなく外出の支度をして降りてきたときは、ぎくりとした。母親は手ぶらで、息子のほうがしぼんだボストンバッグを一つだけ手に提げている。

「お出かけですか。」

「はい……。」

この親子は、何を話すときでも、決まってはにかむような笑いを浮かべる。客のことで余計な穿鑿はしないのが習わしなのだが、つい、さりげなく、

「今日は朝から ウ オダやかな日和で……どちらまで？」

と尋ねないではいられなかった。

「え……あちこち、いろいろと……。」

母親はそう答えただけであつた。あやうく、東尋坊、と口に出かかったが、

「もし、郊外のほうへお出かけでしたら、私鉄やバスの時間を調べて差し上げますが。」

と言って[B]色をうかがうと、

「いえ、結構で……交通の便は発つ前にだいたい聞いてきましたすけに。日暮れまでには戻ります。」

母親は、別段動じたふうもなくそう言うのと、んだら、行つて参ります、と丁寧に頭を下げた。

親子は、約束どおり日暮れ前に帰つてきたが、それを玄関に出迎えて、思わず、あ、と驚きの声を漏らしてしまった。

母親は出かけたときのままだったが、息子のほうは、髪を短く伸ばしていた頭がすっかり丸められて、^{*うんすい}雲水のように青々としていたからである。

① あまりの思いがけなさに、ただ目を見張っていると、

「まづ、こういうことになりやんして……やっぱし風がしみると見えて、くしゃみを、はや三度もしました。」

母親は、しかたなさそうに笑つて息子を顧みた。息子のほうはにこりともせずうつむいて、これまたしかたがないというふうに青い頭をゆるく左右に振っている。どうやら、どちらも納得ずくの^{*ていはう}剃髪らしく、

「なんとまあ、涼しげな頭におなりで。」

と、ようやく声を上げてから、ふと、宿泊カードに光林寺内とあつたのを思い出した。

「それじゃ、こちらがお坊さんに……？」

「へえ、雲水になりますんで。明日から、この^{*}大本山に入門するんでやんす。」

母親は目をしばたたきながらそう言った。

それで、この親子にまつわる謎が一度に解けた。大本山、というのは、ここからバスで半時間ほどの山中にある曹洞宗^{そうどうしやう}の名高い^{*}古刹で、毎年春先になると、そこへ入門を志す若い雲水たちが墨染めの衣姿で集まつてくる。この少年もその一人で、北のはずれから母親につき添われてはるばる修行に來たのである。

それにしても、頭を丸めた少年は、前にも増して何か痛々しいほど可憐^{かれん}に見えた。さつき青々とした頭に気づいたとき、まるで雲水のような、とは思つたものの、本物の雲水になるための剃髪だとは思ひも及ばなかったのは、そのせいだが、母親によると、^{*}得度さえ済ませていれば中学卒で入門が許されるという。

けれども、この大本山での修行は峻烈^{しゅんれつ}を極めると聞いている。はたしてこの幼い少年に耐えられるだろうか、他人事ながらはらして、

「でも……お母さんとしては何かとご心配でしょうねえ。」

と言うと、

「なに、こう見えても芯^{しん}の強い子ですから、なんとかこらえてくれましよう。父親も見守つてくれます。」

② 母親は珍しく力んだ口調で、息子にも、自分にも言い聞かせるようにそう言った。

——息子が湯を使っている間、^{*}帳場で母親に茶を出すと、^a問わず語りにこんなことを話してくれた。自分は寺の^{*ぼんさい}梵妻だが、おとしの暮れ近くに、夫の住職が交通事故で亡くなった。夫は、四、五年前から、遠い^{*だんか}檀家の法事に出かけるときは自転車を使っていたが、町のセールスマンの口[C]に乘せられてスクーターに乗り換えたのがまずかった。凍^こつた峠道で、スリップしたところを大型トラックにはねられてしまった。

跡継ぎ^{あとつぎ}の息子はすでに得度を済ませていたが、まだ中学二年生である。しかたなく、町にある同じ宗派の寺に応援を仰いでなんとか急場をしのいできたが、^Eシユッピもかさむし、いつまでも住職のいない寺では困るという檀家の声も高まつて、一刻も早く息子を住職に仕立てないわけにはいかなかった。住職になるには、大本山で三年以上、ほかに本科一年間の修行を積まねばならない。ゆくゆくは高校からしかるべき大学へ進学させるつもりだったが、もはやそんな悠長なことは言っていられない。十五で修行に出すのはかわいそうだが、しかたがなかった。

自分は明日、息子が入門するのを見届けたら、すぐ帰郷する。入門後は百日面会はできないというが、^b里心がつくといけなから面会などせずに、郷里で寺を守りながら、息子がおよそ五年間の修行を終えて帰ってくるのを待つつもりでいる……。

「それじゃ、息子さんは今夜で * 娑婆とは当分のお別れですね。お夕食はうんとごちそうしましょう。何がお好きかしら。」

そうきくと、母親は オソクザに、

「んだら、とんかつにしていただきやんす。」

と言った。

「とんかつ……そんなものでよろしいんですか？」

「へえ。あの子は、寺育ちのくせに、どういふものかとんかつが好物でやんして……。」

③ 母親は、はにかむように笑いながらそう言った。
だから、夕食には、これまででいちばん厚いとんかつをじっくりと揚げて出した。しばらくすると、給仕の女中が降りてきて、

「お二人は、しみり食べてますよ。④ 今のぞいてみたら、お母さんの皿はもう空っぽで、お子さんのほうはまだ食べます。お母さんは箸を置いて、お子さんがせつせと食べるのを黙って見てるんです。」
と言った。

⑤ それから一年近くたった翌年の二月、母親だけが一人でひよっこり訪ねてきた。面会などしないと強気でいても、やはり、一度顔を見ずにはいられなくなったのだらうと思ったが、そうではなかった。修行中の息子が、* 雪作務のとき僧坊の屋根から雪といっしょに転落し、右足を骨折して、今は市内の病院に入院しているのだという。
「もう歩けるふうでやんすが、どういふことになっているやらと思ひましてなあ。」

相変わらず地味な和装の、* 小鬘に白いものが目につくようになった母親は、決して面会ではなく、ただちよつと見舞いに来ただけと言った。

息子の手紙には、病院に来てはいけない、夕方六時に去年の宿で待っているようにとあったと言うから、

「じゃ、お夕食はごいっしょですね。でも、去年とは違いますから、何をお出しすればいいのかしら。」

「さあ……修行中の身ですからになあ。したが、やっぱし……。」

「わかりました。お任せください。」

と引き下がって、女中にとんかつの用意を言いつけた。

夕方六時きっかりに、衣姿の雲水が玄関に立った。びっくりした。わずか一年足らずの間に、顔からも体つきからも可憐さがすっかり消えて、見違えるような凛とした僧になっている。去年、人前では **D** をつぐんだままだった彼は、思いがけなく練れた太い声で、

「お久しぶりです。その節はお世話になりました。」

と言った。それから、調理場から漂ってくる好物のにおいに気づいたらしく、ふと目を和ませて、こちらを見た。

「……よろしかったでしょうか。」

彼は無言で合掌の礼をすると、右脚を少し引きずるようにしながら、母親の待つ二階へゆっくり階段を昇っていった。

(三浦哲郎「とんかつ」による。作問の都合上、本文の一部を変更しています。)

* 近在……都市の近くの村。 * 東尋坊……福井県北部にある、見晴らしのよい崖。

* 雲水……修行僧。 * 剃髪……仏門に入って髪を剃ること。

* 大本山……山の中にある曹洞宗の古い寺。 * 古刹……古く由緒ある寺。

* 得度……出家すること。 * 帳場……旅館で、受付をしたり料金の支払いをしたりする場所。

* 梵妻……僧侶の妻。 * 檀家……仏事を頼み、金銭を寄付して寺の財政を助ける信徒の家。

* 娑婆……様々な規制のある世界に対して、その外の自由な世界。

* 雪作務……仏道修行の一つで、降り積もった雪を除去する作業。

* 僧坊……寺院にある、僧が日常住む家。 * 小鬘……頭の左右側面の髪の毛。

問一 ― 線アゝオのカタカナを漢字に直して答えなさい。

問二 [A] [D]に入る適当なことをそれぞれ漢字一字で答えなさい。

問三 ― 線a「問わず語り」・b「里心がつく」の意味として最も適当なものを次のアゝエからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 「問わず語り」

- ア 相手には何も質問しないで、一方的に話を進めること。
- イ 相手から質問されたこと以外は、一切答えないこと。
- ウ 相手から聞かれたことは、別なことを答えること。
- エ 相手から何も聞かれていないのに、自分から話すこと。

b 「里心がつく」

- ア 離れて初めて、故郷のよさや親のありがたみに気づくこと。
- イ よその土地にいて故郷や親などを恋しく思っただけで帰りたいこと。
- ウ 離れた土地から故郷を思ったときに、親のことが心配になること。
- エ よその土地で故郷や親が懐かしくなり、思わず帰ってしまうこと。

問四 ― 線①「あまりの思いがけなさ」とありますが、その理由をわかりやすく説明しなさい。

問五 ― 線②「母親は珍しく力んだ口調で、息子にも、自分にも言い聞かせるようにそう言った」とありますが、このときの母親の気持ちとして最も適当なものを次のアゝエから選び、記号で答えなさい。

ア まだ幼くてとうてい雲水には見えない息子を前に、本当は修行に行かせたくないという気持ちが強いのだが、半分あきらめるような気持ち押し隠し、息子を突き放そうとしている。

イ 父親が死んでしまったことで、母親としての役割と父親としての役割の両方を担わなければならないという責任感に押しつぶされそうになり、このような母の苦しみを息子にわからせようとしている。

ウ まだ中学を卒業したばかりの息子に対して、強い心をもって修行にたえてほしいと願いつつ、そばにいられないということを受け入れ、待ってようと心に誓っている。

エ 息子の将来をこのように決めてしまったことに負い目を感じて心苦しくなり、息子に対して面と向かって強く言えないので、女主人に話して聞かせるようにしながら、内心ではすまなく思っている。

問六

——線③「だから、夕食には、これまででいちばん厚い、いんかつをじっくりと揚げて出した」とありますが、「これまででいちばん厚い、いんかつ」を夕食に出した「女主人」の気持ちとして最も適当なものを次のア、エから選び、記号で答えなさい。

ア ごちそうならとんかつの他にいくらでも用意できるのんじゃないが、ここは母親の申し出にしたがっておうとする気持ち。

イ 修行中は多くの決まりがあつて食べ物も制限されているはずなので、その前においしいとんかつを食べさせてあげようと思う気持ち。

ウ これから修行を始める少年にとんかつを食べさせることには抵抗もあるが、母親の特別な思い入れにはこたえようと思う気持ち。

エ 母親の子どもを思う心にできるだけこたえてあげたいと考え、少年にとびきりおいしいとんかつを味わわせようと意気込む気持ち。

問七

——線④「今のぞいてみたらう食べてます」とありますが、この「女中」のことばから、母親がどのような気持ちから、どのような行動をとったと想像できますか。五十字以内で具体的に説明しなさい。

問八

——線⑤「それから一年近くたった翌年の二月」とありますが、修行僧としての成長ぶりが最もよく表れている少年の行動を、これより後の部分から探し、十字で書き抜いて答えなさい。

受験番号

氏名	
----	--



問八					問七	問六		問五		問三	問二	問一
						二つ目	一つ目	(2)	(1)			ア
										問四		
												イ
												ウ
90	70	50	30	10								
												エ
												オ
100	80	60	40	20								

[illegible]